



## えと文

麻田 浩

## 野の草

名も無いような雑草が私は好きだ。私の仕事場の裏には、この都会の中に珍らしく雑草の生い繁った空地がある。四季を通じてつんだ草が部屋のあちこちを占領した頃には、一年が過ぎて、ほとんどの草は枯れ、懷れ落ちて捨てられる。だが捨てられず、いつまでも美しい枯れた姿の草もある。余程強い草なのか。旅先の鳥取の砂丘で得た草は十年を経て未だ美しい。そう言えば欧州で見た枯草花の美しさが思い出される。厳しく乾いた地肌に生える草は枯れてもそのままの姿で美しい枯花を咲かせていたりする。小鳥と話し野草を愛したサン・フランチェスコの地アッシジの山麓野の草花、秋の深まりの中で、夏の憶い出の花を色深く、いつまでものこしていた。エジプトで砂漠に生える草と喜んだ手を傷けた草、その葉は皆な鋭い刺……。遠い旅でのコレクションをこうして眺めていると、草花に寄せる思いも、何かそれらが育った風土、そこをめばえた文明と言ったものを彷彿とさせ、私を一種の感慨へと誘うのだ。

(校友・新制作協会協友)